

# 青い眼をした勤王の志士

## アーネストサトウの果たした役割

平成 30 年 9 月 2 日 三觜行雄

### ( I ) 始めに

今年 2018 年は、天皇が王政復古を宣言し、5 か条のご誓文を宣言し、明治と改元してからちょうど 150 年目の節目の年です。私は今までの発表でもこの幕末、維新の時代を取り上げてきました。

〔朝敵から見た戊辰戦争（奥羽列藩同盟）〕

〔幕末維新のキーマン達。慶喜、勝、西郷〕

〔維新の傑物 江藤新平〕

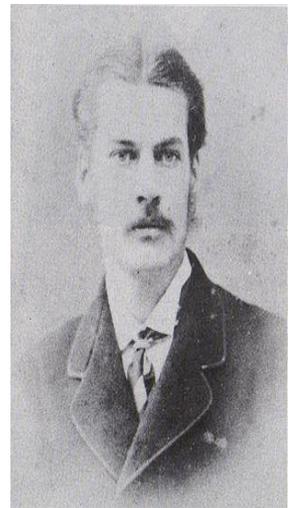
等々で維新にかかわった多くの日本人達を見てきました。

今回はアーネストサトウ（Ernest Mason Satow）という人物の視点から維新をたどってゆこうと考えています。

サトウは、19 歳という若さで日本を訪れ延べ 25 年間に日本で英国人通訳官（外交官）として過ごしました。卓抜した語学力と天性の行動力で幕末の日本を駆け巡り、明治維新達成の大きな原動力としての役割を果たしました。彼の人脈は討幕派、幕府派問わず幅広い交流関係がありました。

### ( II ) アーネスト サトウについて

（薩道（佐藤） 愛之助。）



まず彼の生い立ちをたどってみましょう

1843年（天保14年）イギリス ロンドンに生まれる

父 デービッド（ソルブ系ドイツ人）

母 マーガレット メイソン（イギリス人）

11人の子供の4番目として生まれる

1856年 13歳でミル、ヒルスクールを、首席で3年間で卒業

1859年 ブースフィールド奨学生 2年で飛び級卒業 トリニティカレッジ進学

兄から借りた、ローレンスオリファント著〔エルギン卿の中国、日本使節記〕を読み、日本へのあこがれを持つ。通訳生選抜試験に応募首席で卒業。

1861年通訳生として日本派遣の指名を受ける。 18歳

1862年（文久2年）9月8日横浜着 19歳の時

この文久二年は、2月13日坂下門外の変、3月11日公武合体（家茂と和宮）5月21日寺田屋騒動等々幕末騒乱開始直後のタイミングであった。その後、サトウはこの騒乱の渦中に身を置くことになる。



### （Ⅲ）【サトウの語学力】

①会話力 同時期アレクサンタン、シーボルト

（大シーボルト長男）もいたがそれよりも上

書き物判読力 書道については、俗体、御家流、唐様の書について来日して半年後には、幕府からの書簡をほぼ正確に訳すまでになっていた。

後に英和口語辞典を発刊

Emergency

いざ鎌倉

Love Story            人情噺  
Fool                    ぬけさく。たわけ。トンチキメ  
Cheep                 安かろう悪かろう

後、フランス語を自在にこなし、中国語を身に着け、イタリア語を原書で読みこなす程。

#### 【(Ⅳ)サトウの人柄】

ハリパークス公使（1865年、7月オールコックの後任として着任、18年間サトウの上司）との関わり

（サトウから見た、パークス評）

- 東洋各地に派遣した半ダースほどの英国外交官の成果を合わせても彼の収めた業績には及ばないことは明らか
- この時期外国人で彼ほど日本の歴史に貢献した人物はいない
- 並外れたエネルギーにあふれ、人間としての勇気を持ち、規律に極めて厳格な人物○、短気と粗野な言葉遣いが、時々、周囲の人々の感情を害したこともあるが。



（パークスのサトウ評）

- 自分の成功は、サトウの助力に負うところが多い
- サトウはまことに日本語に精通しており、彼の持つ素晴らしい気転の良さと、気取らない誠実さ、と相まって日本の指導層にいる人々と友好的関係を築くことを可能にしてくれた。このような意味で、両者の上下関係は見事に出来上がっていたといえよう。

#### 【(Ⅴ)サトウから見た日本人達—交流関係と人物評】



## 徳川慶喜

将軍は自分がかつてみた日本人の中で最も貴族的な風貌の一人である。秀麗な顔立ちを持ち、額は高く、鼻筋はよくとうり、実に好紳士であった。



## 西郷隆盛

黒ダイヤのように光る大きな目をしていて、しゃべる時の微笑みには何とも言えぬ親しみが感じられた。ただとても賢い人物だが、なかなか心を開いてくれないので、少々厄介だ。



## 桂小五郎

非常に穏やかで丁寧な物腰の人物。政情について議論すると、すごく熱く語る。

## (VI)サトウの関わった主要な動き

1862. 9. 14 サトウ横浜着1週間後生麦事件勃発

1863, 6月から7月長州 米、仏、蘭船攘夷砲撃実行

1863, 8, 15 薩英戦争に、サトウ戦闘に参戦 捕虜五代友厚、松木弘安(寺島宗則)

### と、接触

1864, 7イギリスより帰国の、伊藤俊輔、井上薫を長州に送り届けその後交流を開始

(8, 20禁門の変 8, 24 第1次長州征討の勅命下る)

1864, 9, 5下関戦争勃発、4か国連合艦隊反撃にサトウも参戦

1865, 4 通訳生から通訳官に昇進 7, 8 パークス着任

(1866, 3 薩長連合成立)

## 1866, 3月から5月にかけて、(英国策論)無題、無記名で投稿

1866, 12~1867, 1 西国への旅(長崎、鹿児島、宇和島)長崎では、シーボルト娘イネ、グラバーらと会う、宇和島藩主 伊達宗城と親交。西郷と兵庫で会う。

(1867, 1, 10 慶喜将軍就任 1, 30孝明天皇崩御)

1867, 4 大阪城でパークスとともに、慶喜の謁見を受ける。慶喜兵庫開港を約束

1867, 5, 大阪から江戸への東海道の旅 掛川で例幣使一行に襲撃を受ける

7 情報収集の旅 箱館。佐渡。七尾(能登半島)

(7, 23 土佐、薩摩王政復古の密約)

8 土佐で山内容堂、後藤象二郎と会う

9, 再度長崎訪問 木戸孝允、伊藤俊輔と会う

(10, 17 薩、長、芸 3 藩連盟なる)

(, 11, 9 慶喜、大政奉還を奏請)

(1868, 1, 3 天皇王政復古を宣す。)

1, 10 慶喜 大坂城において英国他各国公使と会見

(1, 27 鳥羽伏見の戦い)

3, 23 パークス、サトウ御所参内の途中刺客に襲われる

## 【Ⅶ】サトウの功績】

豊富な交友の中で築き上げた人脈は潤滑剤としての役割を持ち、サトウの存在は、当時の志士達に大きな存在感のあるものになっていった。

その中でも、以下に述べる【**英国策論(English policy)**】は、サトウ日本着任わずか 3 年半 22 歳の時に、Japan Times(週間英字新聞で、サトウが無記名、無題)に発表した論文であり、後に阿波藩士 沢田寅三郎により「策論 英国士官 さとう著」として、翻訳発刊され、勤王の志士はもとより、諸大名、公家等々に、広められ討幕派の理論的支柱となったのである。

### 【骨子】

「大君ハ唯、諸侯ノ長ニテ、僅カニ日本半国ホドノミ領分ナルニ、自ラ日本君主ト唱エシハ、是名分不正ニシテ僭越ナリ(途中略)

我ラ、近来大君ト結ビシ条約ヲ廢シ、新タニ帝、及ビ一致シタル諸侯ト取結ブベキヲ、論ジ来レリ」

つまり

1. 将軍は主権者ではなく、諸侯連合の首席に過ぎず、現行の条約はその将軍とだけ結ばれたものである。将軍には実行できないものである。
2. 現行条約を廃し、新たに天皇及び連合諸大名と条約を結び、日本の政権を将軍から諸侯連合に移すべきである。

3. 日本は古より天皇の権威が強かった。将軍は権限を天皇から委任されているに過ぎない。真の日本のトップは、天皇である。

彼はこの論文により、天皇 (Majesty) と、将軍 (Highness) の用語を峻別し、日本の元首は、天皇であって、大君 (将軍) は、その代役と認識すべきであるとの新しい政策の基調を、明確にしたのである。

この論文の影響は大きく、また著者アーネスト、サトウの存在も広く知れ渡ることになってゆくのである。

### **(閑話休題)**

サトウは勿論、イギリス外交官の一員であり、ビジネスライクに言えば、当時の諸外国外交官の本音部分には、日本の内乱に乘じ、介入し双方に武器を与えるビジネスチャンスであり、あわよくば領土的野心をも否定できない事であったろう。

しかし、若くして日本に着任し、諸交流の中で多くの日本人を知る中で日本へのシンパシーは、ますます強くなっていったのであろう。その辺りは、彼の日記の中で (慶応三年 12 月 7 日、1868 年 1 月 1 日) の中で、「日本人同士が殺し合いをしないよう、イギリスの力で、調停を図りたい」との、記録にも表れている。

その一例を見てみよう。

### **(江戸城無血開城への、バックアップの動き)**

慶応 4 年 3 月 21 日 サトウと勝面談

3 月 27 日 勝 横浜に行きパークスと面談

パークスより、東海道先鋒総督府参謀 木梨精一郎へ

「慶喜、いよいよ恭順、相愼み候上は死に入れ候通理これなく助命ありたし。江戸城明け渡し、朝廷お受け取りに相成り候えば、朝廷の御趣意は相立ち申すべし。西洋各国においては、たとい最悪の人といえども、一度大服をとり候人体‘にんてい’を、死に入れ候例これ無し。万国公法の通理かくの如し」

これらの動きの中で、勝との会談をうけたサトウが、新政府に対してパークスから圧力をかけるよう働きかけ、内戦回避に持ち込むべく動き回ったであろうことが、十分推測できるといえよう。

### **(Ⅷ)維新達成から初帰国まで**

その後、1867年11月慶喜大政奉還から、1868年1月戊辰戦争、4月5か条のご誓文発布、5月22日パークス ビクトリア女王の新政権信任状を天皇に渡す。その後も奥羽越列藩同盟、会津戦争、続くも、函館戦争終結で内乱終結。

1869年2月初の賜暇帰国

サトウの人生で最も、充実した7年間が終わる。

## (Ⅸ)サトウの家族



サトウは、戸籍上は、終身独身

1871年 武田兼(カネ、1853～1932) 内妻 500通

のラブレター

指物師の娘とも、植木職人の娘ともいわれているが不詳

子供らは認知し、経済的援助は終始与え続けた

第1子 女の子1873年生後すぐに死去

第2子 長男 栄太郎(1880～1926))

1900年イギリスに呼び寄せるも、結核発症

USA で、農園経営あるフレッドサトウと改名

現地で結婚するも46歳で没

第3子 武田久吉(1883～1972)

東京府立第1中学、東京外国語大学卒

ロンドン帝国理工科大学、バーミンガム大卒

王立キュー植物園で、植物学を研究

1916 理学博士、北大講師、

植物学者、日本山岳会の指導的人物の一人



#### 参考文献

- 一外交官の見た明治維新(上・下) アーネストサトウ訳坂田精一岩波文庫 1960(サトウ77歳の時脱稿)
- アーネストサトウ伝 BM アレン 訳庄田元男 東洋文庫1999
- 図説アーネストサトウ(幕末維新の外交官)有隣堂、横浜開港資料館編
- 遠い崖 サトウ日記抄 萩原延寿 朝日文庫 2008
- ザ、プレミアム 時空超越ドキュメンタリー(江戸城無血開城)  
2017,1,1 NHKBS プレミアム放送

以上